

サンフランシスコ日本語補習校と現地校に通う子どもたち

梶 田 正 巳

松 本 一 子¹⁾

I. はじめに

海外に在留する学齢期の子ども数は1998年5月1日現在で49,670人に上り、その4割が北米地域に集中している。この地域の子どもの就学形態は、現地校と補習校の双方に通学する場合が圧倒的に多く68.3%を占め、現地校等のみの場合は27.8%、日本人学校のみ場合は学校が3校しかないため、3.9%にすぎない。

筆者はベイエリア地域の現地校とサンフランシスコ日本語補習校の両方に通学する子どもたちの実態を調査するため、1998年6月23日から7月3日までサンフランシスコ日本語補習校を訪問、1999年2月27日から3月6日までは現地校5校¹⁾とサンフランシスコ日本語補習校を訪問した。そして、現地校と補習校に通う子どもたちや保護者を対象にアンケートやインタビューを行い、言語能力、学力、友人関係、アイデンティティについて問題点を探った。ここにその内容をまとめてみたい。

II. サンフランシスコ日本語補習校の現状

サンフランシスコ日本語補習校は1999年で創立30周年を迎える。1999年2月現在、児童生徒数1,186名(54クラス)、日本からの派遣教員5名(校長1名、教頭4名)、現地採用教員70名で、ロスアンゼルスにある補習校に次ぎ世界で2番目に大きい補習校である。児童生徒数の増加に伴い、小学部、中高部サンフランシスコ校(以下SF校)に加え、1986年に小学部サンノゼ校(以下SJ校)を、1992年には中高部SJ校を新たに開校したため、現地校4校の校舎を借用している。児童生徒数の内訳は小学部920名、中学部222名、高等部(2年まで)44名だが、1年間で全児童生徒数の三分の一以上が転出入し、平均滞在年数は5年である。SF校は金融サービス業、商社の駐在員や永住予定者が多く、コンピューター産業地域のシリコンバレーにあるSJ校は短期滞在者が多いという特徴がある。補習校まで片道1時間半の道のりを通う

子どもも珍しくない。

年間授業日数は48日しかなく、その内の10日間は6月末から毎日実施される集中学習である。しかし、年間240日の日本の学校と同じ教科書を使い、授業参観、懇談会、運動会、校内文芸作品コンクール、特別授業等の行事を行い、生徒会活動もある。授業は、土曜日ごとに小学部1～2年は国語と算数のみで3時間、小学部3年～中学部3年は国語、算数(数学)、社会、理科で6時間、高等部は国語、表現、選択(数学・社会)で6時間行われる。授業時間の大幅な不足は、周到的な指導計画のもとでカリキュラムを改善し、内容を精選して教材や指導方法を工夫することや、家庭での自主的な学習を習慣化することで補うことになる。小学部SF校は、家庭学習の基本を通信学習におき、SJ校は別の副教材を用意して指導している。高等部の「表現」は、帰国後、帰国子女枠のテストに小論文があることがきっかけで6年前から取り入れられ、論理的思考力や表現力を養うことを目的にしている。また、コンピューターをいち早く高校社会の授業に導入し、情報収集に活用したり、ホームページを作ったりしている。

編入学や進級の基準は、1学年下げた編入学や1年内の留年を認めることなど、柔軟性を持たせるように改正(1998年)された。

サンフランシスコ日本語補習校は日本語が理解できることを前提にした教科指導をしており、日本語が不自由な子どものための特別学級はない。短期滞在者、永住予定者、国際結婚家庭など、子どもたちの成育環境は多様で日本語能力にばらつきがあり、それぞれが補習校に求める内容もさまざまである。小学部への入学時には面接があり、高校への入学及び転入の際には、簡単な試験があるが、現地校と補習校を両立させ、中高部まで続けるのは容易ではない。小学部では、3年生になって授業時間が3時間から6時間に増え、教科内容も難しくなる時期が、続けるかどうかで迷う最初の壁になる。また、土曜日はお誕生日会やスポーツクラブ等の練習が重なることが多く、どちらを取るか辛い選択を強いられることもある。この時点で退校の選択をするのは永住予定者が多い。現地校の4～5年生になると課題が多くなり、現地

1) 名古屋大学教育学部並びに愛知淑徳大学留学生別科非常勤講師。

本論文は同氏の執筆によるものである。

校だけで手一杯になって両立に悩むことになる。この時期は、補習校に来るのがやっとなで、勉強よりは情報交換ややすらぎの場になることが多い。補習校で学ぶ子どもたちは、こうした様々な壁にぶつかりながら、なんとか日本語能力を維持しようとしたり、同じ立場の相談相手や遊び相手を求めたり、帰国に備えて必死に勉強したりしている。

補習校の教員は、このように多様な背景をもった子どもたちと週1回しか向き合うことができず、厳しい時間の制約のなかで学習指導、教材研究、児童生徒指導をしなければならない。日本からの派遣教員は校長や教頭といった管理職であり、実際に授業をする教員は、市民権や永住権を取得しているなどの就労可能な条件を満たす現地の限られた人材から採用するため、教員資格を持ち、専門分野も活かした教員の配置は極めて難しいのが現状である。

III. 現地校のESL²⁾教育

今回訪問した学校は、4地区の5校である。

サンフランシスコ地区のClarendon Alternative Elementary Schoolは、日英両語両文化併用プログラムを持った公立学校である。毎日1時間は日本語を学ぶカリキュラムになっており、日英両語併用教育資格を持った教師と日本語が母語の非常勤講師によって授業が進められている。生徒は様々な人種で構成されているが、日本人は全体の18.9%を占めている。日本語講師は生徒達を能力別グループに分けて、一人当たり週4日で1日30分の日本語指導をしていた。1クラス20名のうち二言語とも不自由しないバイリンガルが3~4名いる一方、4~5年生になっても平仮名の読み書きが不十分な生徒が三分の一ほどいて、ばらつきが見られた。

日本文化や日本の教育に魅力を感じて入学を希望する教育熱心な親が多く、毎年全米で実施される学力診断テスト(STAR=Standardized Testing and Reporting)では、今年サンフランシスコ地区で国語が1位、算数2位という成績をおさめた。訪問した時は学芸会が迫っており、日本語と英語のせりふを交互に話す劇や歌の練習を楽しんでいた。

日本語しか話せない生徒から日本語が話せない生徒まで、しかも様々な人種の生徒達が、それぞれ第二言語習得に挑戦しながら異文化を学ぶユニークな学校である。しかし、カリフォルニア州で1998年6月2日に住民投票で採択された「提案227」³⁾は、バイリンガル教育を廃止するという内容であるため、今後の教育方針にどのような影響が出るか気になるところである。

クパチーノ地区では、編入学の場合、家庭で英語以外

の言語を話している生徒は、テストを受けて特別な英語教育が必要だと判断されると、親の承認のもとでELDプログラムがある学校に通うことになる。このプログラムは小学校4校と中学校1校だけに用意されているため、生徒は、居住地にある本来通うはずの学校を離れて集められる。小学校は、レギュラークラスの生徒とはすべて異なる授業を受けるため、休み時間もランチも放課後もELDのクラスの生徒だけで過ごすことになる。基本からしっかりと教育してもらえ一方、テストで決められた点数がとれないとなかなかELDを修了できず、レギュラークラスに入れないという厳しさがある。平均在籍年数は3年である。また、この地区は台湾、日本、韓国等のアジア人が急増し、日本人同士でグループになりやすく、英語の習得が遅れる傾向がある。

訪問したHyde Junior High School(7・8年生のみ)は、一日7時間授業のうちELDは4時間、残りの3時間は数学と体育と選択科目でレギュラークラスの生徒と一緒に受講できる。ELDを修了するには、4年生程度のspeaking, reading, writingの能力が身に付いているかどうかを判断するテストに合格しなければならない。

この学校では、120名の生徒がELD1とELD2の二つのレベルにクラス分けされ、1クラスは20名位ずつであった。見学したELD1の授業では、教室の外に出て目にしたものを文にして発表していた。ELD2では、シンデレラや不思議な国のアリスの話を、用意してきたぬいぐるみや靴や時計などの道具を使って説明していた。ELDの宿題は毎日1時間~1時間半を目安に出され、毎晩20分間好きな本の音読、新聞から記事を選んでまとめる(毎週、世界、国内、地域で起こったことを一つずつ)、アメリカ史を1章ずつ(5ページ)読む、といった内容だった。

日本からこの学校の1年生に入学して4ヶ月の女生徒は、1週間の勉強時間が48時間位、2年9ヶ月たった1年生の男子生徒は20時間位、二人とも家庭教師の指導を受けていた。この女子生徒は日本の友だちに「アメリカの学校は、楽で簡単」と言われていたので、現実のアメリカの授業の難しさや、遅刻をすると教室に入れない、欠席や見学などが減点評価されるなどの厳しさに驚き、日本でのアメリカの学校に対するイメージは安易に作られたものだと言っていた。

クパチーノ地区のMonta Vista High Schoolは全生徒2000人で、内訳はアジア人が56%、白人38%、ヒスパニック3%、その他3%である。130名の英語教育が必要な学習者には、三つのレベルに分けられたELDと、シェルタード・コンテンツ・クラス(Sheltered

Content Class) が用意されている。シェルタード・コンテンツ・クラスは、レギュラークラスと同じ教科書を使い、教科の学習内容に沿って英語教育を行うもので、文学、世界史、アメリカ史、科学、化学、政治／経済などのクラスがある。教科学習をしているこのクラスをとれば、高校卒業の条件も大学入学の条件も満たしていると認められる。このため、ELDのレベル分けのテストを厳密に行い、ELD 2以上であればシェルタード・コンテンツ・クラスをとれるようにしている。ELD 2は、テストで100点中30点、ELD 3は100点中60点をとらなければならない。見学したELD 1の授業は、“White Fang”という小説を映画にしたものを段階を追って4回見た後、質問紙にある28の問いにフルセンテンスで答えるという、かなりレベルの高いものであった。高校2年でアメリカへ来た場合でも、日本でしっかりした英語力をつけてきた生徒は、3月までの2年間で順調に力をつけて、ELD 3に在籍していた。彼女は今後、平常点の評価を上げて卒業し、帰国後、夏休みに塾で勉強して、帰国子女枠で大学を受験する予定だという。

パロアルト地区はクパチーノ地区とは異なった方法で英語教育が必要な者を受け入れている。この地区の小中学校では、子どもたちは遊びや生活の中から言語を学んでいくものだという考えから、最初から居住地の学校のレギュラークラスに入れる自校方式をとっている。そして、1日30分～1時間程度クラスから取り出して、図書室などで教師と1対1で英語を勉強する。中学校はELDがあり、Jane Lathrop Stanford Middle School(6・7・8年生)に100名の英語教育が必要な学習者が集まってくる。しかし、ELDクラスで学ぶのは6年生が1日1時間のみ、7・8年生は1日2時間である。残りの5時間はレギュラークラスで数学、理科、体育、選択2科目を学び、授業中「バイリンガルチューター」の個人指導を受けることができる。バイリンガルチューターは、生徒一人あたり週に10時間までと決められているが、渡米直後の生徒はもちろん、2年以上いてもサポートが必要な科目があれば要請することができる。本人が授業内容を把握できるように、授業中の先生の話、クラスメイトの発表を日本語に変えたり、本人の言いたいことを英語に変えたりしてもらえ心強いサポートシステムである。

従来、クパチーノ方式をとっていたが、自校方式に変更したところもある。フリーモント地区のWeibel Elementary Schoolは全生徒数850名で、そのうちの76%が海外からの居住者である。豊かな新興住宅地で、中国、台湾、インド等のアジア出身が一番多いが、特別に英語教育を必要とする者はわずか50名である。彼らは

毎日30分、レベル別の小グループや個別で英語を勉強している。

IV. 二言語習得の問題点

(1) 低年齢の場合

駐在員の年齢が若くなり、子どもが幼児期に渡米したり、アメリカで誕生したりして母語形成期⁴⁾をアメリカで過ごすケースが増加している。小学部SJ校でも低学年の増加が著しく、1995年の1年生は2クラス57名だったが、1998年には4クラス99名に増えてきた。

3～5年後に日本に帰れば日本語能力はすぐ取り戻せると安易に考えているうちに、滞在が長期化してしまうことがある。日本にいればいつでも日本語の環境の中にいられるが、アメリカでは、日本語を使う環境を意識して作る必要がある。あるいは、英語は遊びの中で自然に身に付けていくと考えていると、気がついたときには語彙力がアメリカの子どもよりずっと少なく、追いつくのにかなりの時間とエネルギーがいるということもある。その一方で、結果的に親の在米期間が15年以上になり、10～11歳の子どもが日本語も英語も順調に習得しているいくつかの事例がある。その場合に共通していることは、家庭では日本語を話す、日本語を話す時は文の途中で英語を混ぜないで最後まで日本語だけで話す、といったルールを作り、日本語での話しかけや話し合い、本の読み聞かせを心がけ、母語としての日本語の土台作りをしていたことであった。そして、さらにバイリンガルを目指したケースでは、アメリカで生きていく英語力をつけさせるためには英語の習得を自然任せにしないことが必要と考えて、子どもの言葉の成長に合わせてチューターをつけ、日本語と英語のどちらが後れを取っても、いずれ取り戻すと考えて見守った、という打ち明け話があった。

現地校でなかなか英語の力がつかないと、担当の教師に家庭で日本語を使うのをやめて英語に専念するようにアドバイスされることがあるが、母語形成期の子どもから日本語を奪うと、低学年ほど短期間に日本語の能力が低下し、取り戻すのに苦労することになるようである。

(2) 緘黙状態に陥る場合

日本では学級委員を引き受けるなど、成績もよく友人関係も問題なく過ごしてきた子が、現地校では全く話せない状態に陥り、つらい毎日を送るケースがある。

A君は小学4年生の9月に渡米し、補習校と現地校に通ったが、4年生の間は現地校で一言も話すことができなかった。間違った英語を話すのが怖くて、完璧な英語でなければ話せないと思い、苦しくて何度も泣いた。週5回毎日30分のELDの授業を4～5人で受けたが、そ

のうちの日本人と話すだけで、5年生になっても消極的で学校を仮病で休むこともあった。転機は6年生になった時、台湾からきた子がELDのクラスに入り、最初から積極的に授業に参加する態度に驚いたことだった。「通じなくてもいいから、何でも話そう」と決心した。ちょうどミドルスクールになりELDのクラスに日本人の友達がいなくなったこともいいきっかけだった。

彼は4～5年の2年間を「あんなに苦しむことはなかった」と後悔している。彼はその間、日英両言語のできる家庭教師に英文法を、アメリカ人のチューターに英会話を習い、毎日必死で勉強していたが、これらの先生にも心を開くことができず、英語をうまく話せるようにはならなかった。

この時期の補習校では、日本語を100%理解して勉強することがうれしくて、夏休みの宿題が多くても苦にならず、ずっと楽しかったと打ち明けている。その後は、この会話能力の遅れを取り戻そうと頑張り、「できればこのままアメリカの高校に行きたい。いずれアメリカに戻ってきたい」と言い残して、中学3年で日本に帰国した。

B子さんは、6歳で渡米し、1年生から4年生まで、現地校で一言も話さず、わからないと涙が出てくる状態が続いたが、幸いまわりに日本人が多く、最低限度の学校生活は送れた。4年目に入り、周りの日本人がほとんど帰国したこと、やさしいアメリカ人の友人が一人できたこと、少し英語力に自信が持てるようになってきたことが重なり、現地校にとけこむようになった。

A君の場合は6年、B子さんの場合は7年という比較的長い滞在であったため、最初の2～4年の遅れを後で挽回することができた。しかし、1～3年の滞在者の場合は、ミドルスクールのELD担当教師の「1年目は話そうとせず、2年目からやっと話し始めるようになるが、口をつぐみ、ずっと黙ったままで帰国するケースも少なくない」という発言のように厳しい状況がある。

(3) 再渡米や複数の国で滞在する場合

渡米が2回目であったり、複数の国で滞在するケースも増えている。何歳で日本を離れたかによって、その国の言語や文化の受け入れ方に違いが生まれるが、それが一度ならず二度三度となると、めまぐるしい環境の変化に戸惑うことになる。初回の経験が役に立ったり、初回と二回目では状況がすっかり変わっていて、かえって混乱したりと、さまざまである。

C君姉弟の場合は、最初の渡米が姉小学5年生、C君1歳であった。4年半の滞在後帰国し、C君は3年間日本の学校に通い、小学4年生で再渡米した。このとき大学生になった姉は、自分が小学5年生の時に英語で苦労

したことから、弟に同じ思いをさせないようにチューターをすることにした。自分の体験を元にアメリカ生活のアドバイスをしたり、週2回文法の説明や単語テストなどをして勉強をみたりすることで戸惑いを和らげている。

D子さん姉弟の場合は、Dさんが5～8歳まで、弟が3歳まで滞米し帰国。二回目はDさんが日本の中学3年の2学期に渡米して現地校の高校1年生になり、弟は小学4年生であった。Dさんは、8歳までの滞米経験で自信を持ち、期待に胸を膨らませて高校に入学したが、日本の学校とのシステムの違いにとまどい、登校拒否をおこしてしまった。

E君はドイツで生まれ、小学4年までドイツの現地校に通い、ドイツ語で学習した。補習校がない地域だったため、日本の民間の通信教育を利用して日本語や教科の勉強をした。帰国後、5年から中学2年の1学期まで日本の学校教育を受け、2学期からはアメリカの現地校でESLの指導も順調に受けながら学んでいる。親の転勤によるやむを得ない移動であるが、母親自身も海外で育ったという家庭環境も影響して、環境の変化に順応する強さが身に付いていたようである。

(4) 学校・学年の選択

三つ目の学校でやっと自分の居場所を見つけることができたケースがある。

F君は小学校1年生で渡米した。親は1年に編入を希望したが、体が大きいということで2年に編入することになった。配属されたELDのクラスの男子に暴力をふるわれ、女子からは言葉の暴力を受けた。十分な意思表示ができない上に教師の対応もまずく、暴力が頻繁に繰り返されたことから、1年後に転校した。F君の環境が良くなるようにとレベルの高いといわれている地区の学校を選んだが、スポーツが苦手で、まだ言葉が不自由なため共通の話題も見つけられなかったことから、友だちの輪に入ろうとしても受け入れてもらうことはできなかった。暴力はなくなったが、ジュースを髪にかけられたり、無視されるような行為が続いた。渡米以来ずっとランチを一人で食べる日が続くうち、ストレスによる頭痛や腹痛で学校に行けなくなった。担任や校長、地区のカウンセラーと話し合ったが、事態は好転せず、帰国を考えるに至った。しかし、F君が家族が分かれて帰国することを嫌がり、父親と一緒に住むことを望んだため、学校のレベルにこだわらず、学年も1年下げて、もう一度転校した。この三つ目の学校で、初めてF君の話を聞いて受け入れてくれる友達に出会うことができた。学年を1年下げたことで授業の理解も深まり、英語に自信を持つきっかけになった。F君が納得できるアメリカ生活は、渡米

して3年半でやっと始まったのである。

V. 学力と評価

「ずっと日本にいたら普通レベルの学力を身に付けていたと思うが、アメリカにいたばかりに日本語も英語も中途半端になってしまっているのが悔しい」という高校生がいた。実際、中高生用のアンケートでも「英語を学んだことで日本語の習得が遅れたと思いますか」という設問に「はい」と答えたのが、長期滞在者や永住予定者が多いSF校では38%、短期滞在者が多いSJ校では65%いた。また、ELD在籍者はSF校で19%だが、SJ校では38%であった。

月曜日から金曜日まで現地校に通い、残りの時間で補習校の勉強をしているのだから、日本語の学習時間が不足するのは当然である。その上、現地校での勉強がELDクラスでメインストリームから外れていれば、いっそう中途半端だという思いを抱くことになる。しかし、補習校が中学3年生対象に学習の定着度を見るために実施している学力診断テストは、日本の公立中学校の平均と比較して、国語は補習校の方が上、算数は同程度という結果が出ている。平均滞在年数5年という数字を考慮すれば、個人差が大きいとはいっても、日本語での教科学習を毎週継続することの成果が出ているともいえるが、帰国後、日本の学校で後れを取らないように、また帰国子女枠の入試に備えて、補習校以外に、塾通いをする生徒も少なくないのが実状である。

英語力については日常言語は二年もあれば習得できるが、学習言語の習得には5~7年を要するといわれている。不自由なく話している子どもの日常会話をきいて、親は読み書きの英語力も実力以上に高く評価しがちである。そうした親に対し、自分の英語力のなさを打ち明けられないでいるという子どもの告白もある。アメリカ滞在の期間や渡米時の年齢を考えると、頑張るだけだと、頑張るだけでは解決できない問題があることを認識した上で、それぞれの子どもの能力や個性に応じた目標を立てることが必要になる。

現地校でなかなか意思表示できなかった子が、バイリンガルチューターの助けを借りて授業中に手を挙げたり、先生のところに質問に出かけたりしたところ、とても評価されたという報告や、分からないなりに一生懸命努力してレポートを書いたら、努力したことが認められたという報告からも分かるように、アメリカでは授業に積極的に参加することが高く評価される。

ミドルスクールのELD1の授業で、13人の内の最初の一人が前に出て、家で読んできた本を紹介したときのことである。教師から「13人が本を紹介しますから、一

人12回質問をしてください。質問がゼロの人はFです」という説明があった。これは発言しなければF (Failure) になるという厳しいものである。一方的に先生の話聴く一斉授業という日本のスタイルに慣れた中学生にとって、対話型の授業、ホームルームなし、担任なし、何かあったらカウンセラーに相談する、といったアメリカのスタイルは、特にコミュニケーション能力が要求されてとまどうことが多い。この違いをしっかりと認識して行動しないと、どんなに能力があっても認められる機会を失ってしまう。

海外から帰国した子どもたちを受け入れている日本の学校の教師達は、帰国児童生徒の英語力が数年前に比べて明らかに低下していると言う。現地の母親の一人は、最近「アメリカに着いたその日から日本に帰る日を指折り数え」、「旅行や買い物などの楽しみに徹する」ような母親が多いと指摘している。海外にいながら、親を含めて、積極的に現地の人達と関わろうとしなかったり、帰国後の勉強を意識しすぎたりして、外国語や異文化に触れる折角の機会を逃しているのは残念なことである。

VI. アイデンティティ

「私は何者か」を考える様々なエピソードがある。

アメリカ生まれの小学生が作文で「私はアメリカ人。私は日本人。えっ、私は何人？わからなくなっちゃった。…」と書いている。また、6歳の時渡米して現在高2の女生徒は「私はアメリカ人ではない。アメリカ人の食生活や男女関係にはついていけない。でも、日本に行って体験入学をすると、自分とはどこか違うものを感じる。一体、自分は何人？」という感想を漏らしている。

「早く友だちと遊べるように必死になって英語を学んでいる子が、何ヶ月かに一度壁に向かって『日本に帰りたい。アメリカ人なんて大嫌い。心が通じない』などと、涙を浮かべてブツブツ言うものの、翌日になるとまた頑張るって学校に行っている。そういう一生懸命になっている子を現地校はよくサポートしてくれている」という母親の話があった。当の本人は「どこの国に住んでも幸せがあるから日本人でよかったとは答えられない。アメリカに生まれていたらアメリカがいいと思ったと思う」と答えている。

実際にアメリカに来て生活するようになると、日本で思い描いていたアメリカと現実のアメリカの違いに気付く。現地校で初めて知りあうのはELDのクラスと一緒にになった人であり、アメリカ人ではなく、アジア人であることが多い。ELDからレギュラーのクラスに移ってもアジア人が多い学校では、髪の毛が黒いグループと金髪のグループに分かれてしまう。憧れていたはずの

アメリカ人に近づけるどころか、かえって遠ざかり、彼らに批判的な見方をされてしまったりする。その結果、そうしたアメリカ人を今度は冷静な目で観察するようになる。

補習校の特別授業の「真剣に喋り、真剣に聞く会」で2分間スピーチがあった。中1の男子生徒は、12才の時に日本の修学旅行で広島に出かけた時と、アメリカのサイエンスキャンプの時を比較して、日本のやり方を批判的に見ていた。日本では先生も生徒もこの日のために新調したおしゃれな服を着てきたが、アメリカでは普段着の汚れてもいい服。牛肉のすき焼きの夕飯に対し、いつものスパゲティーやホットドッグ。プロのカメラマンによる記念撮影に対し、自分のカメラで記念撮影、などが印象的だったという。

6年生の時に渡米し、現在高2の男子生徒は「政治家になって日本を良くしたい」と言った。滞米期間が長くなってくると、日本とアメリカを客観的に観察したうえで日本を批判する子が多くなる。補習校の教師によると、これは日本に期待するものが大きいからだそうだ。

「あなたは日本人だから、日本語が話せなくてはダメ。おばあちゃんやおじいちゃんと話をすることもできないのでは困る」と言い聞かせて日本語を勉強するように説得した。何度日本語で話しかけても、“I don't speak Japanese. Go away!!”と英語でしか答えず困った時期もある。しかし、何百回日本語をやめると言ったかわからない息子は、高一になった今、「やめなくて本当に良かった」と言っている。

二言語二文化にまたがって育つ子どもをとりまく環境も多様化している。7、8年滞米して、家族が学校生活やアメリカ生活を楽しめるようになった頃に会社から帰任命令がきても、日本に帰らず、転職してそのままアメリカ生活を続ける家族が増えている。しかし、永住す

ると決めたわけではなく、帰りたくなったときに帰るという柔軟性のある将来設計である。ハーフではなくダブル。複数言語、複数文化にまたがった「日本人でもアメリカ人でもなく、私は私」という新しいアイデンティティーが、ここで確かに生まれようとしている。

(附記)

本調査にご協力頂きました多くの方々に記して感謝の意を申し上げます。

[注]

- 1) Weibel Elementary School in Fremont, Clarendon Alternative Elementary School in San Francisco, Monta Vista High School in Cupertino, Hyde Junior High School in Cupertino, Jane Lathrop Stanford Middle School in Palo Alto.
- 2) この地域では、ESL (English as a Second Language) 教育をするプログラムをELD (English Language Development) と呼んでいる。
- 3) 「提案227」は、これまでのバイリンガル教育を廃止し、代わりに、英語を母国語としない生徒に対し1年間みの集中的な英語教育をして、早く通常の授業にもどすという内容の法案。しかし、1年後に、さらに英語教育を継続する必要があると教師が判断したとき、延長を申し込めば認められる余地も残されている。
- 4) 0～4歳で母語の骨組みができ、12～13歳までに母語が形成される。(中島和子, 1998『バイリンガル教育の方法』アルク, p.23)

(1999年9月16日 受稿)